名曲「里の秋」の時代と風土
―成東とのゆかりにふれつつ

三木　紀人

「里の秋」はあまりにも有名な曲で、その有名さは、日本だけじゃなくて地球的な規模で広がっているということを実感しますのは、外国人の留学生なんかで、日本の歌をレパートリーとしてもってる人に聞くと、この「里の秋」が入っているんですよね。

その証拠として台湾から見えている大学院ドクターコースの留学生の游美媛さん、ちょっと一部だけ歌ってくれませんか、あたまのところだけ、一番だけでいいですけど。ちょっとマイクを貸して。

【留学生：静かな静かな　里の秋
　　お背戸に木の実の落ちる夜は
　　ああ　母さんとただ二人
　　栗の実煮てます　いろりばた
　　（中国語で繰り返す）
　台湾では恋の歌です、ありがとうございました。（拍手）】

というような具合で、驚くべきことだと思うんですね。時間の関係で、一人に代表してもらいましたけども、多分、どの留学生でもこの歌を、歌える。歌いながら、とても情感を込めて、夢見るような瞳でみんな歌うんですね。非常に感情移入しながら、それぞれの里を思い出しながら、あるいはそれぞれの懐かしいある時代を思い出しながら、心を込めて歌う、そういう歌です。

今の歌い方、お気づきのように、ちょっと演歌が入っていますね。演歌の名人なんです、今の方。単なる留学生ではなくて、セミプロというよりプロの歌手で台湾出身の方です。ドクターコースの学生で、そういう歌の歌詞を専門的立場で分析研究もしている人です。

さて、その「里の秋」の分析、歌詞の分析から、そろそろ入りたいと思いますけれども、「静かな静かな　里の秋」から始まっておりますね。「静か」っていう言葉、「里」という言葉、二行目の「お背戸」なんていうのも、ある種のキーワードかと思うんですけどね。日本人、特に古きよき時代を知っている日本人にとって、静かさとか、里とか、背戸って言葉は、とてもしみじみとした何かを心の中に呼び覚ます言葉であったろうと思うんですね。いや、であった、じゃなくて、今でもそうだろうと思いますけど。

里というのは、山里の里、都とか町に対する里であり、あるいは山に対する里である。上代の古事記、万葉集の時代では、里は山に対する言葉である。人のいない危険な山間部に対して、複数の人が生きている、生活を営んでいる、心の安らぐ場所が里だった。そういう里と、それから都会に対するひなびた世界を、里っていう平安期以降の使い方と、それからまた、個人的な立場では、自分の実家、個人的な住まいがあるところを里といって、例えば、宮廷で仕事をしている宮廷女房とか、貴族たちにとっては、これに対する言葉は、「宮」であった。宮と里、山と里、都と里、いろいろな里の使い方や、意味の広がりがありまして、そのどれにも共通するのは、ほっと一息、自分の世界に帰ってきたなあと

か、ここにいれば大丈夫とか、緊張もストレスもない、それから懐かしい信頼関係が出来上がっているような少数の人たちと、狭い、しかし温かい世界を分かち持っている、そうところが里であった。

というような言葉の使い方とか、意味合いに関するいろいろな歴史を背景としながら、この詩も歌われていると思うんですね。作詞者の斎藤信夫さんは、そんなにややこしいことを考えながら、詩を詠んでいるわけじゃなくて、すーっとなだらかに、この詩はでてきたと思うんですけど。一方、静かさというのは、にぎやかさとかやかましさに対する静かさですけども、これはある意味では、今の里と同じようなイメージで使われる言葉で、何もない、何もなかった、やはり懐かしい状態、正しい状態といいたくなるような、ある理想的な、絶対的な状況を指す言葉である。「静か」って言葉は、非常に古来大切にされてきた。特に仏教の世界では、理想的な、絶対的な境地を、二文字でくくるとしたら、「明静（みょうじょう）」というんですね。

明るさと静かさ。「めいせい」ではなくて、仏教語では呉音で「みょうじょう」といいます。明るさと静かさ、暗いどろどろした、やかましい世界がこの世のとんでもない特徴、傾向だとすれば、それに対する絶対的な正しい世界、正しい状態が、明るさと静かさという言葉で代表され、つくられているというようなことを、天台宗の教えですけど、思い出してみると、この歌の中では、明るさは二番に出ているんですよね。一番が「せい」あるいは「じょう」、二番が「みょう」「めい」。頭に静かさと明るさが歌われていて、まさにこれは一番、二番を通して、天台仏教でいう理想的な境地、人間が求め、最後にたどり着くべき正しい、ある世界を、一番、二番の中に歌いこんでいる。

これも、そういう理解で歌ったのか、たまたまそうなったのか、ちょっと確認できないんですけども。もしかしたら、歌詞を作られた斎藤信夫さんは、非常に教養のある方だったから、そういう天台宗の教えなんかを身に受けて、その立場でさりげなくこういう詩の中に、教えを溶かし込んでるんじゃないかっていうふうに考えても、そう買い被りじゃないような気がします。斎藤さんとのゆかりが、私、全然ないもんですから、あるいはご遺族ともつながりがないので、確認のしようがないんですけども。

もうちょっと、暇が、暇って言っちゃ失礼ですけど、時間があれば、しかるべきところに調査に行くんですけどね。斎藤さんのお生まれになったのは、ここから車で十五分ぐらいのところでしょう。それから小学校とか、それから隠遁された先は、ここからそんなに遠いところじゃなかったはずなので、そこにこの方と個人的なつながりのあったどなたかが、まだ静かな明るい、それこそ絶対的ないい余生を、送られているんじゃないかと思いながら、なかなかそういうつながりを個人的に確認できずに、今日、来てしまったんですけど。

元へもどりますと、そういう絶対的ないい世界を、この歌詞の一行目から表現しながら、そういう中に誰がどのような思いを抱えてたたずんでいるか、生きているか、ということをずっと読み進めていきますと、「お背戸に木の実の落ちる夜は」とあるんですね。背戸ってのは、ご承知のように、表に対して後ろ側の世界、台所とか、炊事場とか、いろいろものをおいて置くところとか、あるいは正面から入るよりも、違う通路のほうが何だか自分に合っているとか、心が安らぐとかっていうような気持の人は、あえて背戸を選んで、そこを自分たちの、大げさに言う

と、魂のよりどころとしていた日々があった。私にもそれ経験があります。

そういう背戸に心を傾けながら、あるときふっと木の実の落ちる夜があった。そういう夜に、実の落ちる音を聞きながら、あらためて静かさをしみじみと体験しつつ、いい状態の中で生きている私。その私は何者か、ということが三行目に現れていて、ここでこの詩の世界は急にある種の緊張をはらむんですね。

その転換の最初のところに、「ああ」というため息のような、あるいは小さな叫び声のような言葉が挟み込まれている。この、「ああ」は何だろう、ということになるんですけども、これは後ほど明らかになってきます。その後の、「母さんとただ二人」という言葉も、いろいろ吟味してゆくと、考えがあちらこちらに広がっていくかもしれません。「母さん」って言葉は、特別な響きを持っていて、かあちゃんとか、おっかあとか、あるいは、おかあさんとか、おかあちゃんとか、いろいろ母親を呼ぶ言葉はたくさんこの時代にあった中で、母さんと呼ぶ人はどういう環境の子供だったか、その子供と母さんと呼ばれた相手との間にはどういう関係があり、どういう共通理解が二人の間に働いていたか、なんてことを考えていくと、いろいろこの言葉をめぐる用例を調べていく調査が必要になってくるんですね。

私の記憶では、ことさら母さんとか父さんという言葉を自分は使ったことなかったんですけども、私が教わった先生から、「どう、母さん元気か」、というような言葉を掛けられたことがあって、その先生のそういう言葉の選び方や使い方が、何だかとても格別なものを含んでいるような気がして、のちのち、何気なくだんだん聞いていくと、あれなんですね、島崎藤村の家庭を扱った、家族を扱った文章の中に、母さん父さんという言葉がたくさんでてくるんですね。

後で確認してみたら、その先生も、藤村文学に若いころ心引かれていた時代があった。それから、生まれも藤村の生まれ育った木曽方面だったということで、やっぱり島崎藤村との関係で、この言葉が選ばれ、使われしているということが言えそうです。斎藤さんもひょっとしたら、そうなんだろうか。いや、そうではなくて、この辺の地域で、昔から母親は母さんと呼ぶのが当然だったんだと、もし、言われたら、今の仮説を撤回しますけど、いかがでしょうかね。

皆さんは、何てお呼びになっているでしょうか、母親のことを、お母さんのことを。もう、今では、母さんって言葉は、使われてないですよね。もし、使う子供たちがいたら、どうしてそんな言葉知ってるの、誰から聞いた、とか、やや尊敬の気持を交えながら、聞いてみたいような気がするような、そういう言葉ではないかと思いますけど。だから、「ああ」というため息交じりの言葉の後に、「母さん」という言葉が出てきて、その後の言葉がまた、非常にインパクトが強いですね、どきっとする何かを含んでいる。

「ただ二人」。ことさらどうして「ただ二人」と言ったかというと、一人ではないし、三人以上でもないってこと、それから母さんと、と断ってんですから、お父さんがいないんですね。そのいない父親は一体どこに行ったのか、今どこにいるのか、最初からいなかったのか、どれなんだろうということになりますね。入試問題だと、正しいと思うものに○をつけよとか、自分の考えその根拠を述べよとか、そういう問題をつい作りたくなるんですけど。なぜ「ただ二人」か。これはだんだんこの詩

の中で明らかになっていくんですね。この辺から、この詩が当初思っていたような安らかな静かなある子供のささやかな幸福を、普遍的な風景ではない、何か特別なものとして歌っているということが明らかになってくるんですね。

「ただ二人」ってことは、兄弟がいないってことも含んでいるわけですね。自分は一人っ子である。一人っ子は最初からそうだったのか、一時的にそうなのか、どうなんだろうってことが、また分からないわけですけど、取りあえずは、お母さんとただ二人ってことは、いるはずの、いてほしい兄弟の分まで、一人っ子である自分は母親と対しながら、この人のために尽くしていかなきゃいけない。というようなそういう緊張感と、それから母親を自分が独り占めしているという、喜びとか、興奮とか、そういったことをまた思わせてくれるんじゃないかと思うんです。

それから、ただ、という言葉の背景には、お父さんがいないっていうこと、だから、自分は兄弟の分までどころか、父親の分までこのお母さんのために、何かをしなくちゃいけない。大変なんだ、と思いながらその大変な立場を、自分なりに必死に守り、一方でお母さんと二人だってことの幸せをかみしめながら生きていこう、あるいは今、そう生きているとか。そういうことを子供心に思っている。思っている子供は、男の子か女の子か。どちらであろうか。

私は、男の子だっていうふうに思ってるんですけど。別にそれは、根拠はあるわけじゃないですけど。自分がもと男の子だったということだけです。ですから、こういう場面を想像したことがないこともないな、という記憶があるものですから。母親を男の子、一人の男の子として自分が守っていくとか、それから母親を独り占めしながら、その幸せをどのように、自分なりに味わい、かみしめるか、と思いながら、一方、いずれしかるべきときがくれば、こういう状況は終わらなくてはいけない。大人になり、恋をしたり、結婚したり、家庭を営んだりって中で、一時的にあった「ああ母さんとただ二人」っていう、こういう状態はいずれ終わらなくてはいけない、別のというようなことをほのかに意識しながら、今の、取りあえずの母親と二人でいる静かな静かな生活をかみしめている。

ただ、それはそれとして、男の子はお母さんと一緒に、栗の実を煮ている、しかもいろりばたで。そういうひなびた風景の中で、つつましやかな幸福と、緊張と、それから父親がいないことに伴ういろいろな不安を抱えながら生きているようです。それが一体いつの時代のことだろうか、いつの時代であってもいいのか、よくないのか。この歌に何か特別な時代背景があるのかどうか。ということは、三番で分かります。

取りあえずそこに至る前に、二番の展開を見ておきますと、今度は「明るい明るい　星の空」。「明るい明るい」は「静かな静かな」に対して、明静、絶対的な最高の状況を担うもう一つの言葉。やはり、さらにその明るさを意識させる星の空、満天の星を見ながら、先ほどのような時間を、男の子は母親と過ごしている。そのときに、空を鴨が渡っていくんですね。

「鳴き鳴き夜鴨の　渡る夜は」。この鴨は一羽か、二羽か、あるいはおびただしい群れをなしているのか、どうやらこの詩の中では、鴨は一羽ではないかという気がするんですね。というのは、鴨の習性として、雄と雌ははっきりとした行動の違いがあって、雌の鴨は、じーっと一カ所

で子供を守り育てながら、行動範囲を広げていかない。自分のテリトリーを守っている。我が家、我が世界を子供のために守るという、そういう何か役割分担があって、雄のほうが、自由にあちらこちらを飛行しながら別の目的を果たす。

例えば、餌を運んでくるとか、外敵が来るか来ないかっていうことを、あらかじめ察知するために、いわば偵察をしたりとか、そういう分担があり、それを想像していると、とてもじゃないけど、鴨を食べるなんてことは考えたくなくなるんですけどね。でも、悲しいほどに鴨はおいしいんですよね特に、この歌で歌われているような時期の鴨は、この世の幸せを食べる人に実感させるほどの味であって、殊に房総は鴨の名産地ですよね。そう考えると、この「里の秋」の鳴き鳴き渡る夜鴨を、その後一体どこの誰が食べただろうか、どんな味だったのか、なんてことまで考えてしまいたくなるんですけども。

この詩の中では、もちろんそういうことは余計なことであって、この鴨を通してお父さんを思い出すんですね。お父さんも今、遠いところにいるけれども、移動中であってほしい、ここに帰るための移動を続けていてほしいというふうに思いながら、子供はまた、「ああ」という叫び声をもらす。

「ああ　父さんのあの笑顔／栗の実　食べては　思い出す」

漸く煮上がった栗の実を、お母さんと一緒に食べながら、子供のほうは、懐かしいお父さんの笑顔を思い出しつつ、あのお父さんは、今我が家に向かって帰ってくる途中であろうか、どうだろうか。そう思いながら、急にうれしいような、悲しいような、切ない気持に襲われ、でも、おいしいものはおいしいってことで、栗の実をむしゃむしゃ食べている。

この栗と親子の情愛という構図については、思い出される方が多いと思いますけれども、万葉集に名作がありますよね。その名作は、お配りした資料二枚目の上の左のほうに、貼り込んでおきましたけども、山上憶良という人が、官僚としての立場で、離れ離れの生活を送っているときに、いつもいつも目の前に子供の面影がちらつく、その分、仕事に専念できない自分にあきれながら、でもやはり、この世のもっとも大切なものは子供なんだ、そのためには、なにものを犠牲にしても自分に悔いはない、そういう父親としての思いを込めながら、歌った歌の中に、

「瓜食(うりは)めば　子等(こども)思ほゆ。栗食めば　まして偲(しの)はゆ。」

という有名なフレーズがありまして、栗を食べていると子供のことを思い出す。この「こども」は、今の言葉と違って、「ども」は複数を表わす「ども」なんですね。サルどもとか、イヌどものあの「ども」と同じで、「こども」は子供たちという意味です。この人には、子供がたくさんいたみたいですね。

その何人もいる子供を、自分の宝として意識し、幸せな父親であることをかみしめながら、瓜を食べつつ、今、子供たちはどうしているだろう、と思い、さらに別の場面、別の時間に栗を食べていると、それ以上に子供のことが常々思い出されてならないという、そういう、食べ物とそれから働く連想作用でしょうか。思い出される子供たちのことが歌われていて、「何処(いづこ)より　来たりしものぞ。」あの子供たちは、一体どこから来たんだ、かつてはどこにもいなかったのに、自分は知らなかったのに、今どこから来たのか分からない子供たちなのに、自分の心を支配して、ここでこうしていても、思い出されてたまらない。

「眼交に　もとな懸りて、安眠し寝さぬ。」

絶えずわけもなく、子供の面影が目の前にちらちらして、寝る気も起こらない。非常に意識がさえてきて、ああ、会いたいな、どうしているだろう、と思いつつ、思ったこと、

「銀も　金も玉も　何せむに　優れる宝　子に如かめやも」

というような絶唱が生まれたわけですね。この世で価値あるものとされる、金、銀にはるかに勝る大切なものとして、自分に子供が最大の生きがい、幸福として絶えず意識から離れない。そのことを、食べ物を通して歌った山上憶良の歌を、斎藤さんは知らないはずはないんで、この歌にうかがえる親子関係を逆転させて、子供が親を、栗を食べながら、思い出しているという、そこにこの詩の面白さと、新しさと、それから、ほのかなユーモアと呼びたいようなものがあるような気がするんですね。

「栗の実　食べては　思い出す」

この一番と二番で、普通は「里の秋」は歌い終わるんですよね。よくある、歌番組とかコンサートでは、そうなっております。

さてそれで、さっき触れたお話に戻りますと、三番から、いよいよ今日の、風土と時代、特に時代に話を移さなくちゃいけなくなるわけですけど、

「さよならさよなら　椰子の島」

普通のコンサートで歌われない、三番に目を凝らすと、急に昭和二十年という、特別な時代がこの詩の世界の中に入ってくるんですね。「里の秋」と椰子の島と、どういうつながりがあるかというと、その二つの土地には全くの関係はないけども、この歌の中に歌われている自分、男の子か女の子か分かりませんけども、お父さんが遠いところに行っている家庭の子供にとって、椰子の島は、お父さんがいたところ、ひょっとしたら死んだところかもしれない。安否未確認状態の中で、一体お父さんはどこにどうしているのか、鴨のように今移動中で、こちらに向かって必死の面持ちで、近づいてきてくれているのか、それやこれやは、よく分からないけれども、子供心に、今お帰りになる途中なんだ、というふうに思いながら歌ったのが次の節ですね。

お父さんは、椰子の島に惜別の情を感じるままに、手を振りながら、こちらに向かっていらっしゃるはず。「お舟にゆられて　帰られる」。ここでまた、「ああ」というため息が出てくるんですね。「ああ　父さんよ」。その後、「御無事でと／今夜も　母さんと　祈ります」。未確認でよく分からないことが、ここではっきりします。でも、一番自分にとってうれしい想像は、お父さん元気よく椰子の島に向かって、さよなら、さよならと別れのあいさつを送りながら、日本に向かって、特に自分たち家族のところに、帰ってこようとしている。

今日も、今も、無事でいらっしゃるようにと、お母さんと一緒に祈る。「今夜も」って言いますから、きのうも、おとといも、ずっと毎夜毎夜、お母さんと二人で何をしていたかというと、一番大事な仕事は、お父さんの無事を祈りながら、早く帰ってきてほしい、って気持を祈りに託して時間を送っている。

ということがこの三番に歌われているんですね。一番、二番と三番は、随分つながりが一見分かりにくいんですけども、ここで突然、こういう不思議な三番が出てきちゃうんです。もともとは、一番、二番、三番、四番とあって、もとの詩の中には、本来上に向いたような詩がついてい

る。「星月夜」というのは、もともとの詩の題ですね。それが「里の秋」になったのは、それなりのいきさつがあるんですけども、とにかく最初は、一番から四番まであって、三番は

　きれいなきれいな　椰子の島
　しっかり護って　下さいと
　ああ　父さんのご武運を
　今夜も一人で祈ります

　さっきの歌で、お母さんと二人で、無事を祈っているんですけども、本来の詩の中では、「ご武運を」ってことですから、お父さんは戦争に行ったんですね。その尊敬すべき、大好きなお父さんが、生きていったようなこれからを、自分も成長したら送るんだ、というそういうけなげな決意を、この詩の中に託して、四番の中のここではっきり男の子だと確認できるんですね。まさか女の子ではないですね。

「大きく大きく　なったなら　兵隊さんだよ　うれしいな」

　女の子だったら、冗談っぽくなっちゃいます、間違いなく男の子ですね。今子供だから行けないけれども、大きくなったら、必ずや兵隊になって、憎い敵を滅ぼすために全力を尽くすだろう。「ねえ　母さんよ」。そのことの同意、共感、あるいは激励を求めながら、お母さんに向かって男の子は力強く宣言した。

「僕だって　必ずお国を護ります」

　こう言った、あるいはこう誓った子供のことを、聞いたときのお母さんの思いはいかばかりだったろう、うれしそうだっただろうか、複雑な表情だったのか、あるいは涙をたたえて、無言の表情で、あまり喜ばしくない受け止め方をしたのか、それぞれのお立場でお考えいただきたい。

　お母さんは、決して「必ずお国を護ります」と言ってほしくなかったような気がします。戦争中は違うんじゃないかというような気もしますけども、果たして個人個人のレベルでどうだったんだろう。国の期待し、要求したような建前の、あるいは理念の世界では、こういうときのお母さんは、軍国の母というような立場で励ます母親、力強く、この子供の決意を温かく受け止めて幸せそうな表情を送る、という建前の世界にいられたか。本音の世界はどうだっただろうと。男の子は本気でこう思っていたんだろうかって考えると、私の記憶では、本気でこう思ってたかもしれないと思うんですね。

　なお、この「星月夜」ができたのは、昭和十六年の十二月二十一日、ついさっき仕入れた情報です。ここへ来る途中で、ＪＲの成東駅で降りて、城址公園行ってこの詩の歌碑を見てきたんですけど。斎藤さん自筆のちょっと面白い筆跡の歌碑がでていて、その碑の左にありました解説に、昭和十六年十二月二十一日、つまり十二月八日の開戦まもなくのことだったようにあります。ご存じのように開戦後しばらくの間は、日本は勢いよく、世界に向かって力を見せつけていた、明るい元気な時代だったですね、十七年三月ごろまで。三月に突然何かアメリカの爆撃機が飛んできて東京に爆弾を落とす。そのころから、はてな、もしや、という感覚が広がっていくんですけども、十六年十二月二十一日というのは、間もなく日本は世界を制覇する、日本は神の国として勢いよく全地球を自分たちが支配するときがくる、そのとき自分は、どこでどういう立場でいるだろうか。自分が大きくなるまでにそれが終わっちゃったら、自分たちの仕事はなくなるんだけどもと、そういう楽天的な思いの

中で、随分われわれは興奮したものです。

そのときは、私はまだ幼稚園でした。幼稚園の落ちこぼれでしたけれども、来年から小学校に上がる立場でありながら、その世界制覇の夢に結構元気づけられたものです。その十六年の十二月の二十一日に、子供のイメージで戦争の広がっている椰子の島、南の明るいところはどういうところだったか、ということのよりどころになった知識あるいは教養といったものは、どういうところでどのように、形作られていたかってことを考える糸口が、資料左の下にあります、例えば、『冒険ダン吉』というようなものなんですね。

これを中心として、これは多分、当時の国策に沿ったことだと思うんですね。出版文化の中で、南洋ものとか、南方ものといわれたが、特に児童文化を中心として、いろんな形で花開いた。映画、漫画、読み物、その他の世界で。南の明るい世界に、日本の新しい力を借りて、現地の人たちが救援を待っている。野蛮なヨーロッパの、よこしまな手から自分たちを守ってくれるはずの、日本に対する期待が南の島の各地で広がっていく。そのことをシンボルとして扱ったのが、『冒険ダン吉』なんですね。一種のこれは、例の昔話の、桃太郎とサルのような関係で冒険ダン吉の家来で、カリ公なんてネズミがいて、すごく懐かしいんです。昔の仲間でクラス会やったら、『冒険ダン吉』を呼びたいとか、カリ公も呼ぼうとか、そういう話になりそうなぐらいに、幼な心で彼らを実在の対象と思いこんでいたわれわれの世代では懐かしい存在なんですけども。

そういうような読み物とか絵を通して、椰子の島の茂る南の世界に、こころ引かれながら、彼らのピンチを自分たちが救い、それが日本の発展に直結していく、そういう思いで男の子、あるいは青年、あるいはお父さんたちは、南方戦争に出ることにそうためらいはなかった。むしろ明るい希望を持って、散らばっていったと思うんですね。その背景に、こういうものがあった。ところが、もちろん行ってみたら、どういう現実が彼らを待っていたかということは、あらためて言うまでもないですね。それから、日本人の進出が現地の、椰子の実の茂る世界の人たちに、いかなる恐怖と不安を与えたかなど、それやこれやを考えると、昭和十年代の、十六年までの、南方ブームとその後の現実との大きな落差をとてもつらい気持ちで思い出します。

その大きな落差の中に、この「里の秋」と「星月夜」の歌詞も、もちろん含まれているんですね。十六年十二月二十一日、「星月夜」の中に歌われているお父さんと子供は、冒険ダン吉に代表されるような、こういうイメージをもち、希望をもち、南に向かって心を開いていた、自分に何ができるかという、いつそういうことに参加できるか、非常に夢中になって追求しながらいたかと思うんですね。それが挫折して、お父さんは夢破れ、傷を抱えて帰ってくるだろうか、それどころじゃない、あちらで既に亡き人の列に入っているんじゃないかとか、その、もし死んだんならば、どういう死に方をしたんだろうかとか、消息の分からない身寄りをお持ちの人たちは、それぞれの立場で帰ってこない南の人たちのことを、繰り返し繰り返し考えながら、つらい日々を二十年代に送ることになる。

その一人である女性の歌集を、去年頂きました。幼児教育の世界で大変功労のあった石井達子さんという方の『道』という歌集です。そこから四首、抜いといたんですけれども。

待ちかねし輸送船着くと駆けつけて
　昏き博多の海に対きおり

戦争が終わって無事に生き残って、帰ってくる人たちが乗っている船を迎えに、博多の港に出向いて、果たしてその船の中に懐かしいあの人が乗っているだろうか、再会できるだろうか、できないだろうか、という痛切な思いが歌われています。残念ながらこの人はできなかったわけですけどね。そのできなかった相手は、お兄さんなんですね。明るく元気で優秀なお兄さん、このときこの歌を歌った石井さんは、昭和三年のお生まれですから、二十年にはまだ十七歳、昔の高等女学校の生徒ですか。そういう人が大学、東京大学、大学生の立場で南の島に行ってしまったお兄さんの行方を、ずっと恋い慕いながら、再会のときが来るだろうか来ないだろうか思い悩み、とうとうその時は来なかった。

多分、この辺でこのように亡くなったのではと思いつつ、戦没地とされるニューギニアの地図をじーっと見たり、そのニューギニアの形を、自分で地図として描きながら、追悼する日々もおありだったようです。

飢えし身をよろめき倒れなお這いて
　南の島に果てたる兄か

例えば、こんなような形で亡くなったのではないかとか、確認はできないんですけども思っていたところ、しばらくしてから、白木の何も入っていない箱が、帰ってきただけだったということです。

それを、涙一滴こぼさずに迎えた、お母さんのけなげな面持ちを歌った歌がその次ですね。

戦いに子を失いたるも老母の
　けなげなりしに言葉なかりき

そのときのお母さんの思い、お母さんの切なさ、けなげさを目の当たりにしながら何か言葉を掛けたい、言わなくちゃ、と思いながら、ついに言葉がみつからなかった。この方のおっしゃるには、このとき何を言うべきだったか、何を言えたかってことをずっと考えながら、はっと気がついたら、六十年がたっていた。そういう立場の歌集を、八十過ぎのよわいで、歌集の中にまとめられたわけです。

さて、もとへ戻りますと、この詩がいつ「星月夜」から「里の秋」に変わったかというと、昭和二十年の十二月の二十四日に、南方から船に乗って、無事に生きていらっしゃる方が運ばれてきて、浦賀に上陸する。そのときがちょうどクリスマスイブ。ＮＨＫが、そのお帰りになる人たちを出迎える一連の企画を立てました。そのプログラムの中に、現地で特設したささやかなスタジオに川田正子さんを呼んで、そこで歓迎の、生きてお帰りになった方々をお迎えする歌を、とにかく用意したわけです。

戦争が終わって間もなかったから、万事余裕がない中で、急にそのリクエストが来たんですね。この「里の秋」の曲を作った海沼実さんという人のところにその注文が飛び込んだ。海沼さんのところには、昭和十六年の暮れに、若い詩人から郵便で送られてきた「星月夜」という詩がたまたまあって、その詩をうまくアレンジすれば、今日の緊急の目的にぴったりじゃないか、というふうに思いながら、慌ただしくその日、ペンを走らせて、「星月夜」という題は暗いから、せっかくお帰りになった人たちを迎えるには、いかがなものかということで、「里の秋」という、人びとの郷愁をかき立て、お帰りになった喜びを実感させるようなフレーズとして、「里の秋」っていう題にして、歌詞の一部に手直しを

して、非常に慌ただしい中で、川田さんに出来上がったばかりのこの歌を歌ってもらったのです。

川田さんという人は天才的な少女歌手だったので、非常に落ち着き払った表情で、分かりましたといって、清らかな歌声でこの歌を初めから全国に向けて流した。そのときスタジオにいた人たちの中に、まだ生き残ってる方が少なからずおられて、共通の証言によると、歌が終わったときに、スタジオに物音ひとつ聞こえなくなった。まさに「静かな静かな」に似たような何ともいえない気分が支配して、みんな言葉を失ったというんです。

この歌の素晴らしさとか、生きて帰ってきた人たちの思い、出迎えの家族の気持ちなど、あれやこれや想像しながら万感がこみ上げて、言葉にならない思いを皆がかかえる中で、しーんとして静まり返って寂として声のないスタジオに、臨時に置かれたあちらこちらの受話器に、放送終了とともに、全国から電話が殺到して、もう一回今の曲を聞かせて、というリクエストが多かったんですね。それに応じて、川田正子さんはその日に、繰り返し繰り返しこの歌を歌って、声がかれるほど歌ったんです。そういうようなことがあったんです。

そのいきさつに触れた川田正子さんのインタビュー番組が昨年十二月二十四日ありました。その番組ではとても川田さんお元気で、全然年を感じさせない様子でした、いつまでもいつまでも、お元気な方だと思い込んでたら、この番組から、川田さんは、ひと月も生きておられなかった。急死されたんですね。大変悲しい思いをいたしました。

まだいろいろ話題がございますけれども、取りあえず「里の秋」は、こんなふうにして始まった。そもそものこういう感動的な物語の背景と

「里の秋」歌碑　山武市成東町成東城跡公園内

した、この歌の全国的な影響、感動の広がり、それが今や、地球的規模、世界的な規模に広がって、その原点に、この成東の里の風景がある。

ここで過ごした優秀な詩人の体験やら記憶やら、あるいは人びととのかかわりがある。ということは、この土地のために、長く語りつぐべきだし、また喜ばしいこととして、心に刻んでいきたいと思いますので、もしまだいらしたことのない方は、ぜひ、成東の駅から歩いて、今日測ったら十五分ぐらいで、山の上でちょっと厳しい石段があったりしますが、斎藤さんのとても立派な筆跡を直接使った歌碑があります。もう、とっくにご存知で、何度かいらっしゃった方もあるかと思います。桜の木が植わっていて、花見どきには、さぞかしいい空間だろうなという感想を持ちました。つい今日の午前中、確認してきたばかりのことを話題としまして、この辺でお話を閉じたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

（みき　すみと・本学人文学部長、日本研究センター所長）